

ドナウ地域は 列強間の複雑な国際関係を 生き抜いてきた

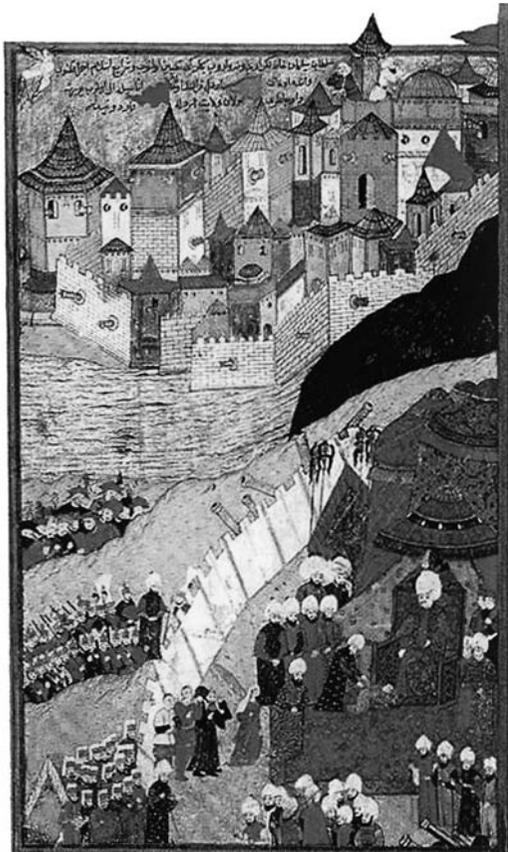
みなみづか しんご
南塚信吾
法政大学教授

オスマン帝国の北上でドナウ地域は
国際関係の舞台となる

ドナウ地域は、ヨーロッパの東の辺境として、複雑な国際関係のなかで歴史を生きてきた。それは決して、列強の国際関係によって一方的に影響を受けるというのではなく、ドナウ地域から国際関係に影響を与えているという、相互関係でもあった。また、ドナウ地域は民族的に多様で錯綜しているがゆえに、列強の影響を受けやすかったのであるが、それに対して、ドナウ地域の諸民族自身が連帯して列強に対抗しようという試みも、不断に行なわれていた。

ドナウ地域が国際関係の舞台となるのは、オスマン帝国が北上し、ハプスブルク帝国と対峙するところからであると言つてよい。

オスマン帝国は、14世紀中ごろからバルカンに進出、1389年にコソヴォの戦いに勝利してから、ドナウ地域を



オスマン帝国は1541年、ハンガリーへ本格的に侵入。占領したブダで、スルタン・スレイマンは、ハプスブルク家に対抗して庇護していたハンガリー国王サボヤイ・ヤーノシュの遺児と接見した

北上し、1459年にはセルビアを支配するまでになった。そして、1526年に、ドナウ河沿いのモハーチでの戦いでハンガリー王国軍を破って、ウィーンに迫った。ウィーンは29年にオスマン軍に包囲されたが、神聖ローマ帝国軍の支援によりかろうじてこれを

撃退したのである。

モハーチの戦いでハンガリー国王が死んだ結果、オーストリアに進出していたハプスブルク家がボヘミアとハンガリーの王位を継承した。ここに、ハプスブルク帝国は「ドナウ帝国」となり、オスマン帝国と対立することにな



みなみづか しんご ● 富山県出身。1970年、東京大学大学院博士課程単位取得退学。著者に『静かな革命』『アウトローの世界史』『バダベシュト史』など



1526年のモハーチの戦いまで、オスマン帝国の支配はワラキアやベオグラード付近までに留まっていたが、1541年の本格侵入を経て、ブダ付近まで拡大した。その結果、ハンガリー王国はオスマン帝国直轄地、オスマンの宗主権を認める東ハンガリー王国（のちのトランシルヴァニア侯国）、ハプスブルク支配域に分かれた

った。この間にオスマンの脅威もあった。「ドナウ帝国」では、「再販農奴制」と言われる、独特の封建制が打ち立てられた。

1683年にオスマン帝国が2度目のウィーン包囲を行なって、これが失敗に終わると、オスマン帝国の衰勢は一挙に進行し、99年のカルロヴィッツ条約によって、オスマン帝国はドナウ中流域から撤退した。セルビアにいたるドナウ河中流域の支配はハプスブルクの手に入り、この後、ハプスブルク

の啓蒙専制支配のもとで、封建制の改革や工業の育成や都市の建設が図られた。

1848年、ドナウ流域で諸民族の革命運動が起きた

フランス革命とナポレオン支配の後、オーストリア宰相メッテルニヒのもとでの専制政治と経済的不況の結果、1848年の春にドナウ流域に一連の革命が生じた。

1848年3月1日、パリの2月革命の知らせが、ポジョニ（ドイツ語ではプレスブルク、現在のスロヴァキアの首都ブラチスラヴァ）に届いた。ここにあったハンガリー国会で、改革派の小貴族コシュートが、ハプスブルク帝国全体の立憲的改編を求める演説を行ない、各地に反響を呼んだ。3月11日、ボヘミアのプラハで改革派が組織され、ウィーンでは3月13日に革命が起ころい、メッテルニヒが辞任に追い込まれた。ドナウ下流のペシウトでは、3月15日に民衆蜂起が起きた。3月25日にはクロアチアの議会が改革要求を取りまとめた。トランシルヴァニアの諸都市でも、封建制の変革と民族的な要求とを掲げる運動が起こった。

こうした諸民族の運動は、ウィーン自身の革命と呼応して、ハプスブルク帝国を揺るがすかに見えたが、しだいにウィーンの反動に直面し、また相互の連携が取れないままに崩壊した。最後まで残った北イタリアやハンガリーの革命と独立の運動は1849年8月までに、ハプスブルクの軍隊などによって鎮圧されてしまった。

このような敗北の反省から、1862年、ハンガリー革命の指導者であったコシュートは、亡命先のイタリアで「ドナウ連合」案を提議した。これは、ハプスブルク帝国とオスマン帝国に支配されるドナウ流域の諸国（ハンガリー、ルーマニア、セルビア、ブルガリア）の連邦を構想したもので、政府所在地をローテーションで回すという考えも含んだ画期的なものであった。

しかし、こうした「連邦」の考えは実現せず、1867年にはハプスブルク帝国はオーストリアとハンガリーの二重君主国となった。この「妥協」は、1849年以後も続くハンガリーの抵抗への妥協であったが、一方でチェコとの関係、他方ではクロアチア、セルビアなどとの関係を悪化させた。

こういう問題はあったものの、この



1683年のウィーン包囲の失敗以降、オスマン帝国は後退し、トランシルヴァニア、セルビア、ワラキアの一部まで、ハプスブルクの支配下となる。1699年のカルロヴィッツ条約で引かれた境界線は、基本的に1918年のハプスブルク帝国解体まで維持された

オスマン帝国をめぐる列国の争いは新たな争いの種を蒔いた

ドナウ河下流域は、19世紀中ごろにおいても、オスマン帝国の支配下にあった。すでに1804年ごろからセルビア人の独立運動がおきて、それが20

のちオーストリア・ハンガリー帝国の経済発展は急速に進み、ドイツの資本などを取り込みつつ、ドナウ河流域へと経済的利害を拡大させていくことになった。

年代にはギリシア独立戦争へと広がり、オスマン帝国の支配は揺るぎ始めていたが、それが決定的になるのは、53年に始まるクリミア戦争（56年）を経たからであった。ロシアに対して戦うオスマン帝国に英仏が味方して、ロシアは敗北を喫したが、この結果、モルドヴァ、ワラキア、セルビアの自治が保障され、ドナウ航行の自由や黒海の中立などが認められた。

この時期から、オスマン帝国をめぐる列国の争いは「東方問題」と称されることになる。不凍港を求めて南下するロシア、インドへの安定したルートを確認したいイギリス、聖地へのアクセスを確認したいフランスが、オスマン帝国の動揺から来る問題を「東方問題」とみなしたのである。

1860年代にはドナウ河下流域において、明確な民族運動が展開する。ルーマニア人の住むドナウ二公国が59年に統一され、やがて66年にルーマニアとなる。この時期にブルガリア人の民族運動が始まり、76年に4月蜂起を決定したが、オスマン軍に鎮圧され、多数が殺害された。これがきっかけとなって、77年には露土戦争が起きるのである。

露土戦争はロシアの勝利に終わり、その結果、1878年にサン・ステファノ条約が結ばれた。これはブルガリアを独立させ、ロシアが地中海に陸路進出できる可能性を保障するものであったので、イギリス、オーストリアは強く反発した。そのため、ドイツのビスマルクが仲介役を演じて、同年、ベルリン会議が開かれ、ベルリン条約が結ばれた。

ベルリン条約では、セルビア、ルーマニア、ツルナゴラの独立が認められ、ブルガリアはサン・ステファノ条約の領土の3分の1に縮小され、マケドニアがオスマン領に戻された。また、ボスニア・ヘルツェゴヴィナがオーストリアの行政下におかれた。実は、このような列強の措置は、ドナウ流域に新たな争いの種を蒔くものであった。

これ以後、新たにドイツとオーストリアが「東方問題」に関係を持つてくるのである。この間、セルビアのマルコヴィチらによってバルカンのスラヴ人国家間の「バルカン連邦」（1872年）が模索されたりしたが、現実にはならなかった。

ベルリン会議ののち、バルカン諸国には西欧資本が流入して、鉄道、港湾、



1867年のアウスグライヒ(妥協)によって、オーストリア帝国とハンガリー王国からなる二重君主国が成立する。1878年のサン・ステファノ条約、およびベルリン条約によって、セルビア、ルーマニア、ツルナゴラ、ブルガリアが独立した

道路などのインフラストラクチャーの建設を促進し、鉱物資源や農産物の輸出の環境をつくり上げていった。

サラエヴォでの暗殺事件から第一次世界大戦に発展した

ベルリン条約で新たに生み出された問題がマケドニア問題であった。良港テッサロニキと肥沃な平原を擁するマケドニア地域をめぐっては、1880年代以後、ブルガリア、セルビア、ギリシアが領有を主張して激しく争った。

これに対して、マケドニア内部からはIMRO(内部マケドニア革命組織)が作られ、1903年にはオスマン帝国支配に対してイリデン蜂起を起こすが、これは徹底的に鎮圧された。

オスマン帝国の側では、1876年に制定されていた憲法が実施されず、国内の改革が遅れていた。そのため1908年、「統一と進歩委員会」(青年トルコ)が蜂起し、オスマン帝国の憲法復活運動を始めた。これに危機感を抱いたオーストリアは、同年、ボスニ

ア・ヘルツェゴヴィナを「併合」した。しかし、これは、セルビアの反オーストリア・ナショナリズムを狂信的にしただけであった。

1912年、オスマン帝国が北アフリカをめぐる伊土戦争に敗れたことに乗じて、ブルガリア、セルビア、ギリシア、ツルナゴラ(モンテネグロ)が「バルカン同盟」を結成し、ロシアの後押しを受けて、オスマン帝国に宣戦して勝利した。しかし、マケドニアなどの領土の配分をめぐって、バルカン諸国間の対立が生じ、13年には、新たにブルガリアが他の同盟国およびルーマニア、オスマン帝国と戦うことになった。ブルガリアは惨敗して領土を失い、深い不満を残した。一方、このバルカン戦争で自信をつけたセルビアは、オーストリアとの対決姿勢をいっそう強めることになった。

1914年6月、オーストリアの帝位継承者フランツ・フェルディナンドがボスニアの中心地サラエヴォにおいてセルビアの青年に暗殺されたことをきっかけに、オーストリア、セルビア間に戦争が起こり、それは三国同盟、三国協商を動員して、たちまち世界大戦に発展したのである。



1914年から始まった第一次世界大戦の結果、18年にオーストリア=ハンガリー二重君主国は崩壊。オーストリアは共和国となり、ハンガリー共和国、チェコスロヴァキア共和国、セルビア・クロアチア・スロヴェニア王国（1929年にユーゴスラヴィア王国となる）が生まれた

ナチスドイツはドナウ地域を自らの「生活圏」の重要な一部と考えた

第一次世界大戦後、ヴェルサイユ体制の下で、ドナウ地域を支配していた2つの帝国は崩壊し、「民族自決」の名の下に、多数の「民族国家（国民国家）」が成立した。だがヴェルサイユ体制は、仏英の利害を反映し、必ずしも文字通りの「民族自決」を実現しなかった。大戦はドナウ地域の諸民族の共存を保障するような形では終わらず、敗戦国

に多大な犠牲を負わせることになった。こうして、1920年代に、チェコスロヴァキア、ユーゴスラヴィア、ルーマニアは「小協商」と呼ばれる同盟関係を結び、「修正主義」を掲げるハンガリー、ブルガリアを包囲する体制を築いた。

ロシア革命によってロシアの影響力が後退し、敗戦によってドイツとハプスブルク帝国の力が後退したドナウ河を巡る国際関係は、まずはフランス、そしてイギリスが主導し、反ポリシェ

ヴィキのための戦略的な地域となったのである。戦後、土地改革も試みられたが、ドナウ地域の「民族国家」の多くは、貧しい農民の支配的な社会を抱え続けた。

このような不合理もあって、1930年代になると、この地域にファシズム類似の運動が勢力を増した。ハンガリーには「矢十字」運動、クロアチアには「ウスタシャ」、ルーマニアには「鉄衛団」という具合である。ナチスドイツはしだいにドナウ地域を自らの「生活圏」の重要な一部と考えるようになった。

世界恐慌のなかでバルカン諸国は相互協力の必要性を感じ、ファシズムの危機が高まるなかで、国境の相互保障を目指して、1934年10月に「バルカン協商」を締結した。これには、ギリシア、ユーゴスラヴィア、ルーマニア、トルコの4カ国が参加した。だが、36年以後、多くはドイツに取り込まれ、40年には協商は崩壊した。

1949年以後、ドナウ地域は「冷戦」の最前線になった

第二次世界大戦後、ドナウ地域の大部分はソ連と連合国の手で、ファシズ

2007年1月1日からのブルガリアとルーマニアのEU加盟を目前に控え、記念撮影用パネルから顔を出し、携帯電話で撮影をするルーマニアの若者たち。パネルには「ようこそヨーロッパへ」と書かれている。ブカレストの南西200キロにあるクライオヴァにて、2006年12月29日

写真提供：EPA＝時事

ムから解放された。ドナウ地域を含む東欧は、当面、「人民民主主義」と呼ばれる、議会制、多党制の反ファシズム体制を取ることになった。1946年のトルーマン・ドクトリンやマーシャル・プランによって、アメリカがドナウ地域を含む東欧の取り込みを図り始めると、当初は自国に「友好的」な国々の成立を望んでいたソ連も、ドナウ地域を「ソ連圏」に編入し始めた。

47年には、独力で解放を勝ち取ったユーゴスラヴィアを活用してコミンフォルムを

結成したが、ブルガリア、ルーマニアなどと「バルカン連邦」を構想するユーゴスラヴィアとそれを嫌うソ連との確執が昂じて、48年にはユーゴスラヴィアがコミンフォルムから「追放」されることになった。

1949年以後、ドナウ地域は、オーストリアとユーゴスラ

ヴィアを除いて、ソ連圏に含まれ、米ソ「冷戦」の最前線に置かれることになった。ルーマニア、ブルガリア、アルバニア、ハンガリー、チェコスロヴァキアには、一党制のソ連型社会主義制度が導入された。56年にはこのような社会主義制度を改革する運動がハンガリーに起きたが、それは戦車で鎮圧され、68年にチェコスロヴァキアで起きた同種の運動「プラハの春」も同じ運命をたどった。

それでも、社会主義はこの地域の農民や労働者に一定の生活の向上をもたらした。もはや戦前のような貧しい農民はいなくなった。しかし、そうした生活の改善にもかかわらず、80年代以降のソ連の経済力の低下などの要因により、1989年にはソ連型の社会主義は崩壊したのだった。

EU加盟などを通して、ドナウ地域は西欧との関係を深めつつある

1992年と93年にはユーゴスラヴィア、チェコスロヴァキアが相次いで解体した。ユーゴスラヴィアの解体期には、列強の介入もあって、ボスニアやコソヴォにおいて諸民族間の悲劇的な「内戦」が生じ、深刻な後遺症が残

った。一時は、オーストリア、スロヴェニア、スロヴァキア、チェコ、ハンガリーなどを「市民社会」の成立している「中欧」（ポーランドなども含まれる）、セルビア、ツルナゴラ、マケドニア、ギリシア、アルバニア、ブルガリア、ルーマニアなどを「バルカン」として区別する傾向も生じたが、これもあいまいな区別であり、全体として西欧への志向という点で共通している。

かくて2004年にはチェコ、スロヴァキア、ハンガリー、スロヴェニアがEUに加盟し、07年にはブルガリアとルーマニアも加盟した。さらに、06年にはスロヴェニア、09年にはスロヴァキアがユーロに加盟した。こうして、ドナウ地域は西欧との関係を密接にしつつある。

このような関係のなかで、ドナウ地域には、欧米の資本が流入し、資本主義への再編が進み、この地域は欧米への従属的な地域として組織されつつある。そこでは、大きな経済的・社会的格差が生じており、それが民族的な方向へ再び利用される恐れがないともかぎらない。かつてのようなドナウ地域の諸民族の協力の試みが、いままた必要になっているように思われる。☺